

来ぶらり 10

“時”を盗め！

——長編小説の愉しみ

夏の長い休暇——。まばゆい陽差しと、木立を渡る風が心地よいと感じたら、“旅”へ出てみないか。一冊の長い物語のなかへ。少しばかりけだるい時間のなかで、志賀直哉やブルーストと出会ってみるのもいい。夏だから、心情の旅人への誘い——。

志賀直哉著 『暗夜行路』 岩波書店
志賀直哉全集 第5巻

ある一語句との出会い——

小説を読む時、筋書きだけが気になって、一気に読む楽しみ方と、一語句・数行の文章を丁寧に吟味して、胸の湧きたつ感動を覚え、興奮から息を入れ、長い時間をかけて読むものもある。

志賀直哉作『暗夜行路』を私は後者の読み方をした。

私がこの作品を読んだのは20幾才かで、当時、散歩ばかりの生活をしていた。そのころ、自然の風景に多く親しんだ時でもあった。なかでも夜空の美しさに異常に惹かれて、その色合いが心に妙に響き、なんとか言葉で胸に刻みつけたかと思った。それは、単に色彩を適切に表現した言葉では物足りなかった。なにが宗教的な信心を帯びたものでなくてはならなかった。夜空に感動するたび落着かなかつた。この作品の終節、主人公・時任謙作が山陰道の最高峰・伯耆大山を夜中登る。途中腹痛で、ひとり夜を明かす時の大山をめぐる自然の描写の中に、私は求めるそれによやく出会えた。

「…彼は臂を突いたまま、どれだけの間か眠ったらしく、不意、眼を開いた時には何時か、西辺は青味勝ちの夜明けになっていた。星はまだ姿を

隠さず、数だけが少なくなっていた。空が柔かい青味を帯びていた。それを彼は慈愛を含んだ色だと云う風にした。……」この時の感激は、いまでも心に強いリズムをもって想い出される。

(和書係 奥田孝之)

中里介山著 『大菩薩峠』 富士見書房
時代小説文庫 全20冊

机龍之助が生きている——

机龍之助が、全身にニヒルな雰囲気を書きこみながら、どこか決然と、これまでの倫理感を無視して彷徨う。そんな姿が、遠い憧れとして、今も私のなかで生き続けている。

毎日がたまらなく無為に感じられた10代の終わりごろ、廊下の壁にもたれて、あけ放った窓から、わずかばかりの緑をぼんやり眺めていた夏の日があった。青い一枚板のようになった空に、油蟬の声がにじむように広がってゆく日であった。

廊下には、母が若いころ読み耽った岩波文庫や、父が買い集めた時代小説などが、埃をかぶったままになっている書棚がある。前々から気になっていたのだが、その棚1段を占めている『大菩薩峠』の赤い箱をなにげなく引き出してみた。これまでに出会ったことのない不思議な文体と、底を流れる虚無感、そして壮大な筋立てに引きずられて、

結局その夏いっぱい41巻全部を読んでしまった。

あれから10数年が過ぎて、あの本も今はもうない。登場人物の姿もボールのむこうでおぼろになっちゃったけれど、机龍之助の横顔だけはひときわ鮮やかな^{すがた}で残っている。偶然と必然のはざまに、多くの人たちが出会い、そして離れて行った。そこを無常観がぬうように流れ、机龍之助が、今もふと通り過ぎてゆくことがある。

(運用係 清水裕子)

プルースト著 『失われた時を求めて』
筑摩書房 プルースト全集 第1～10巻

過ぎさった時へ

小説のなかの、主人公達の名によって、鮮やかによみがえる“時”がある。プルーストのプチット・マドレーヌやコンプレーのように物や土地の“名”によって喚起された過去の時間が、流れ出す。僕にとって、小説の作者よりも、主人公達の名が、自分のなかで生き続けるような一種幸福な読書体験は、そう多くはなかった。ドストエフスキーの長編小説群と埴谷雄高の『死霊』、そして、このプルーストぐらいのものであろうか。

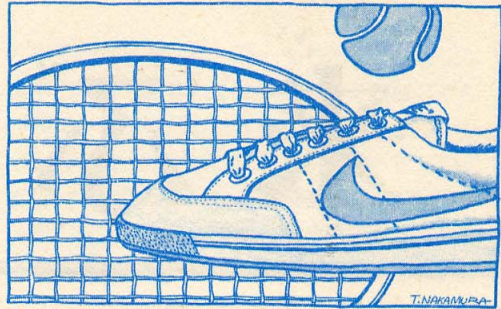
■あれも、これも、面白い■

小学生の頃、夢中で読んだ小説の一つに『巖窟王』がある。いらい、その原作である『モンテ・クリスト伯』を読もうという思いは消えずにあった。折しも5月12日の朝日新聞に掲載された“中島梓さんとモンテ・クリスト伯をよむ”が、俄然^{げぜん}気持ちに拍車をかけた。

子供心に『巖窟王』で感動した自分が、今、『モンテ・クリスト伯』にどんな感想をもつのか、われながら興味深い。さっそく本館所蔵の山内義雄訳・岩波文庫版(全7冊)にとりかかろう。

(雑誌係 中野里美)

一人の少年が、学校の屋根裏部屋で本を読み始めた。まもなく、その物語の運命が、少年の意志に左右されることに、彼が気付いた時…。読み手が物語の中に入ってしまう、そんな不思議なお話がある。世界で一番長い物語『The Neverending Story』。世界中で最も良く読まれているMich-



しかし、この小説を僕は全部読んだ訳ではない。第3編「ゲルマントのほう」までを筑摩世界文学大系版・井上究一郎訳で読んだ。特に「スワン家のほうに」と「花咲く乙女たちのかげに」が収められた1冊は、当時、就職のあてもなく、孤独のうちうつつ積する思いを、この小説の時間のなかに溶解し、必死でなだめ続けるふうに熱中して読んだ。その後、訳本の刊行がとどこおると共に、僕はこの小説の時間から少しずつ離れて行った。いわば、生業^{なりわい}の時間を一枚一枚身にまとうように。

今日新たに、井上訳でプルースト全集が刊行されている。いつかこの小説を最後まで読み終わるとして、かつてここに刻み込んだ僕の時間より、さらに豊かな“時”を見出しうるかどうか、もう自信はない。

(運用係 中山高二)

ael Endeの名作。原作はドイツ語。英語版(Puffin Books刊)を薦めたい。本書は、随所に「それは又別のお話となる」句が現れる。すなわち読者自身の自由な想像力によってのみ、本書は『はてしない物語』となるのである。

(洋書係 鈴木宗一)

『完訳アンデルセン童話集』全7巻(岩波書店)。子どものころに翻案もので出会ったアンデルセン童話。『Eventyr og Historier』の訳でほんらいは「お話と童話」。アンデルセンは、初め、「子どものための童話」と表題をつけたが、子どもばかりでなく、大人も喜んで読んだので、後には“子どものための”をとってしまったという。アンデルセンが生涯の真剣な仕事として40年間書き続けたこれらの童話は、読めば読むほど味わいが深くなり、子どものころとは違った感銘を与えてくれる。

(和書係 上野しのぶ)

視聴覚室を中心に

短大図書館

早いもので視聴覚室が改修されて2ヶ月がたつた。ビデオを中心にあらゆる新しい機器が入り、教員・学生・館員によって、授業やクラブ活動、催事にと広範囲に利用されている。これまでも、3階に18台のビデオブースがあるにはあつたが、あくまで個人単位で見るだけのものであつた。いわば受身一方だつたビデオが、いろいろな機器が入ることによって、素材の選択が広がり、複数の人が楽しめ、しかも自らビデオを作れるようになったという点において意義は大きい。

とはいえ、大多数の学生の関心はもつばら映画の鑑賞に集中しており、彼女らがこれらの機器を自在に活用するようになるには、まだまだ時間がかかるだろう。また視聴覚室の利用が増えたとはいっても、利用者の範囲は、あいかわらず一部の教員やクラブ活動の学生に限られており、手放し

では喜べないのが実情である。その理由のひとつとして、ソフトが質量ともに少なく魅力に欠けることが挙げられる。これには経済的な問題がからむだけに悩みは大きい、一日も早いソフトの拡充が望まれるところだ。次に、高級な機器が入つたため、それをなかなか使いこなせない苦労がある。「メカに弱い」のは、おおむねの女子学生の体質であるだけでなく、係の私の体質でもあるからである。加えて困つたことに、視聴覚室は防音されていないため、「音もれ」で早々と苦情が舞いこみ、対処に頭を痛めている。

将来、視聴覚室は、図書館の一方の中枢として、ニューメディア時代にふさわしく活用の途を広げるであろう。まるで本を借りて読むように、ビデオが身近になる日も、そう遠いことではあるまい。その日のために、近く、ビデオ・クラブみたいなものを作って、一度でいいから視聴覚室を超満員にするような作品を作ってみたいものだと、たわいないことを夢めている。(視聴覚係 霧島浩一)

「イゴノヨミナカワル」、まだ覚えているだろうか。そう、1543年(天文12年)鉄砲伝来の年である。ポルトガル人によって種子島に鉄砲が初めてもたらされ、またたく間に全国に広がった。その後、合戦は、個人戦から鉄砲隊を編成する量と量の戦いになっていき、また、経済力のある大国の優勢・築城術の革新・城下町の変貌等々、以後の世はみな変わったのである。そして、砲術が武芸の中で最も重要な地位を占め、多くの人がその研究を始めるようになり、みずから家々の流儀を興し競うようになった。

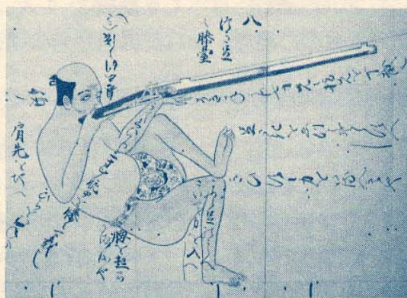
そのひとつに稲富流がある。創始者である丹後田辺の人、稲富直家(のちに祐直と改名、剃髪して一夢と号す。1551—1611)は、祖父直時から銃術を学び、今は「文殊の智慧」で有名な天橋山智恩寺に籠もり、火薬の配合や、発射姿勢を創案・発明し、一流を興した。また、直家は射撃の名手でもあり、初めは一色氏、のちに細川忠興に仕え、朝鮮出兵にも伴われ、加藤清正とともに活躍した。その後、忠興に追われる身になった直家

は、その技を惜しまれ、徳川家康に助けられた。そして、駿府城で家康に、ついで秀忠にも江戸城で、砲術を伝授し、のち尾張大納言義直に仕え、駿府にて没した。

このように砲術家として超一流の直家は、数多くの砲術書・秘伝書を残している。火薬・弾道・姿勢・狙点などを詳細に研究した砲術伝書は、現在からみても神髄を突いた完璧の書といえるものである。当館で所蔵する伝書は「一流一辺之書」慶長12年(1607年)11帖、「極意」慶長15年(1610年)9帖、「一大極意書物」同年、9帖の計29帖からなる折本(11×25cm、写本)。多少の虫喰いは否めないが、保存の状態は良く、松本清張が直家の生涯を描いた小説『火の縄』を執筆する際、この伝書を閲覧し、火縄銃の打ち方などを参考にした。また、数多い射撃姿勢図は、色付きで、打ち方の要領を明確に示すために「ふんどし」ひとつの裸姿で描かれていて、まことに興味深い。

(和書係 中村丈夫)

稲富流一砲術伝授書



ぶっく

・らうんじ

ここ1、2年「シンドローム」(症候群)という言葉がだいぶはやっているようです。シンドロームというのは、もともと「同時に発生した一連の徴候(症状)を総括的にあらわす」医学用語だそう、昔はごく限られた病気に対してだけ用いられたのに、今はなんでもかんでも十把一か

出版界も「シンドローム」症候群

らげにして「〇〇シンドローム」と呼ぶ風潮が出てきました。たとえば「青い鳥症候群」とか「休日症候群」、「燃えつき症候群」から、はては「おしんどローム」といったように…。

どうも出版界もこの風潮にすっかり染まったようで、シンドロームまたは症候群という言葉を使った書名が最近ずいぶん目立ちます。日販の「出版情報検索システム」(NIPS)で調べてもらったところ、昨年の1月から今年の3月まで

だけで27点もありました。もちろんこの中には医学専門書も含まれていますが、それはごくわずか。とくに昨年『ピーター・パン・シンドローム』(D・カイリー 祥伝社)がベストセラーになってから、この傾向はいつそう顕著です。『アパシー・シンドローム』(笠原嘉 岩波書店)『ミドルエイジ症候群』(稲村博 講談社)『テクノ症候群』(下田博次 TBSブリタニカ)『朝刊シンドローム』(笠原嘉 弘文堂)などなど。

それにしても、シンドロームの他にも「ストレス」とか「コンプレックス」といった精神医学の範疇に属するような言葉が書名に目立ち、「こんなものがやるなんて、やっぱり今の世の中病んでいるのかしらん」などと、柄にもなく深刻ぶったりしているんですが…。

(受入係 種田昭平)

来館者を見る“眼”

図書館では正面玄関・開架図書室・参考図書室にカウント・アイを設置している。カウント・アイ?聞き慣れぬ言葉かもしれない。「以前、科学博で入場者数を数えそこねた機械」と言えばわかると思う。

24万人一初詣での入出、ゴールデンウィークのナイター入場者、真夏の浜辺を被う影、紅葉狩りの車の列、冬休み白銀にシユプールを描くスキーヤー…、いずれでもない。まして、市の人口でもない。昭和59年度1年間に大学図書館へ来た人の数である。単純計算で、月平均2万人、1日(開館日のみ)平均900人もが玄関をくぐっている。本を借りる人、返す人、論文・レポートの資料を探す人、調べ事をする人、閲覧室で勉強・読書をする人、コピーで待ち合わせをする人etc。中には、トイレを使いに来ただけの人も含まれているかもしれない。それらすべてを機械は「1人」とカウントする。同じ「1人」なら積極的利用者としての1人になるほうが得だ。あなたは24万分の何人だろう?(運用係 入村和彦)

お知らせ

○「論文貸出」の登録受付中!

卒論・ゼミ論のテーマが決まった4年生を対象に、一般の貸出しとは別枠で「3冊・1ヶ月間」の館外貸出を行う「論文貸出」の登録を受付中です。

○夏休みの長期貸出しが始まります!

取扱い期間：7月8日(月)～9月21日(土)
返納期限：9月27日(金)～10月8日(火)
貸出し冊数：学部学生……5冊まで

論文貸出(4年生) } ……10冊まで
院 生 }

○夏休み中も図書館は開いています!

7月22日(月)から9月21日(土)まで、次のとおり利用できます。
平日：8:50～16:30
土曜日・日曜日・祭日：休館(ただし9月7日・14日・21日は12:00まで開館)

来ぶらり No.10 1985年7月1日発行

発行責任者：波多野里望 編集委員：種田昭平 中山高二

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221